

キューバの音楽「プント」

坂 口 透

1. 音楽を求めたキューバへの旅

筆者がキューバへ初めて渡航したのは1997年、首都ハバナのみ計5日間の滞在だった。その後、仕事を辞めてフリーランスで著述業を始め、1999年から2000年にかけて計3回、のべ5か月ほどキューバに滞在して地方都市を隈なく回り、各地の音楽、舞踊、祭りを見聞する。訪れたその地でしか聴けない音楽に出会う。本稿で紹介する「プント」という音楽は、2000年2月に中部の内陸都市カマグエイで初めて演奏を聴いた。

国内各地で多様な音楽を聴き、その体験を紀行文形式で綴って2000年8月に『キューバ音楽紀行』を刊行。これをきっかけに旅行情報誌の取材・編集の業務を請け負うようになった。スペイン、ポルトガル、メキシコ、さらにグアテマラをはじめとする中米諸国へ行き、現地で音楽を聴くことを重ねた。業務以外にも個人目的でブラジル、ボリビア、アルゼンチン、ペルー、コロンビアなどへ渡航し、音楽や舞踊はもちろん、祭りも見聞する機会に恵まれた。ハイチを除くラテンアメリカの国は2009年にすべて踏破している。

こうしてラテンアメリカ各地の音楽を俯瞰し、2000年前後とは視点を変えてキューバ音楽を見られるようになった。2016年に刊行した『キューバ音楽を歩く旅』にその成果が結実していれば幸いである。音楽に関しての蘊蓄は文献だけではなく、キューバ本国において奏者や歌手など音楽家、音楽研究者から口頭で聞き取った内容も多い。さらには各地の文化会館、音楽会館、ライブハウスでの展示物から書き取った。

2. プントとはどのような音楽か

キューバ国内には、宗主国スペインから伝わった音楽のほか、アフリカから黒人奴隷が持ち込んだ音楽が根付いた。これらが混交して、ソンをはじめとするキューバ独自の音楽も発展した。本稿では、キューバがスペインに植民地化された初期に、入植者によって持ち込まれたプント *Punto* という音楽を紹介する。

キューバ音楽でも、例えばソンやサルサなどのダンス音楽はCDが容易に入手できるほか、来日公演したことのある楽団もあって広く知られている。ルンバやサンテリアなどのアフロ音楽も、少なからずの愛好者が日本に存在する。しかし、プントという音楽は、日本も含めてキューバ国

外ではその名があまり認知されて来なかったようだ。

ところが2017年、プントはユネスコの無形文化遺産に登録された。これによって、キューバ国外での認知度が高まった。

スペイン語でプントという単語の意味は多岐に亘り、英語の「ポイント」にあたる。音楽を指す場合には、混同を避けるためにプント・グアヒーロ **Punto Guajiro** と呼ばれることも多い。グアヒーロとは、カリブ海沿岸諸国を中心に使われる、「農民」を意味する語である。

プントの元となる音楽は、スペイン南部のアンダルシア地方内陸部で中世に親しまれていたとされる。しかし残念なことに、発祥地のアンダルシア地方では消滅してしまった。

中世の欧州では、吟遊詩人が世の中の出来事を詠み込んで歌っていた。デシマ **Décima** という十行詩を詠み、韻を踏んで歌い継ぐ。歌詞の内容はもちろんのこと、韻律でセンス良くどれだけ聴衆を楽しませるか、詩人の力量が問われた。

演奏される歌唱音楽は4分の3拍子で、ギター、複弦3コースのトレス、複弦6コースのラウー（リュート）などの弦楽器が使われる。17世紀にスペインからキューバに渡ったこの音楽は内陸に広まる。そして、クラベスやボンゴといった打楽器によるシンコペーションのリズムが加わった。農村部での日常生活、恋人や家族隣人との関係を風刺した詩が歌われる。

現在キューバでは、プント・リブレ **Punto Libre** という形式が主流である。これは4分の3拍子で伴奏される部分と、演奏が外れて歌手がデシマを詠む部分が交互に繰り返される。歌手は複数おり、たいてい2人が交互に掛け合う。即興でデシマを詠み歌い、いかに面白おかしく聴く人た



写真1 プントで使われる象徴的な楽器
ラウーは複弦6コース



写真2 キューバ音楽全般で使用される
複弦3コースのトレス



写真3 コントラバスでベー
スラインを弾く



写真4 クラベスによりシンコ
ペーションのリズムを刻む

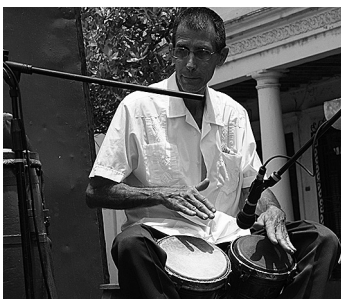


写真5 打楽器ボンゴを叩くことで
アフリカの要素が入る

ちを惹き付けるかが競われるところから、自由を意味するリブレという形容詞が付される。聴衆からは時折笑い声上がるので、感覚としては漫才やコントに近い。こうして歌手同士の歌合戦になるので、論議を意味するコントロベルシア *Controversia* とも呼ばれる。

このようなプントが盛んなのは国内中部のカマグエイ、シエゴ・デ・アビラ、サンクティ・スピリトゥスのほか、西部のピナル・デル・リオなどである。キューバでは一般的にプントのことを、農民音楽を意味するムシカ・カンペシーナ *Música Campesina* と呼ぶことも多い。

とはいえプントは、一般のキューバ人なら誰でも親しめる音楽だ。なぜなら、毎週日曜の夜7時から『パルマス・イ・カーニャス』 *Palmas y Cañas* という1時間のテレビ番組が全国放映されるからである。これはハバナのテレビ局スタジオに地方から音楽奏者を呼び、演奏を放送するもの。パルマは椰子、カーニャはサトウキビを意味するように、農村の音楽をイメージしている。プントの楽団とソンの楽団が交互に登場して演奏するのが一般的な番組編成となっている。合間に司会者による説明や奏者との話のやりとりが挟みこまれ、1時間の番組内で計5曲程度が演奏される。ソンと交互に披露されるためプントは2~3曲ほど演奏されることになる。

3. 現地で聴くプント～シエンフエゴスでの例

シエンフエゴス市はハバナから南東へ約250キロ、キューバ中部に位置する港湾都市。同名のシエンフエゴス州の州都である。1819年にフランス人入植者によって築かれ、2005年には中心街の歴史地区が世界遺産に登録された観光都市としても知られる。周辺地域には黒人奴隷が就労していたことから、アフロ音楽も伝承されている。もう少し内陸の近隣の州はプントが盛んだが、シエンフエゴスで実際にプントが聴けるかどうかは事前にはわからなかった。

筆者が2016年4月にシエンフエゴスへ行った時のこと。泊まった民宿で家主の人に聞くと、日曜の午前中に公園でプントが演奏されるという。それを確認すべく、中心部のマルティ公園でソンを演奏している何人かに尋ねてみた。すると確かに、マルティ公園からそう遠くないビジュエンダス公園で毎週日曜の午前10時頃からプントが演奏されるとの情報を得た。マルティ公園に面する文化会館でルンバを練習していた太鼓奏者にも聞いたが、ほぼ同様の返答だった。

筆者は期待を膨らませて、その週の日曜の午前中に民宿から徒歩10分くらいの場所にあるビジュエンダス公園へ向かった。ビジュエンダス公園では民芸品市が開かれていた。特設舞台には音響機器が準備され、奏者や歌手と思われる人たちが集まっている。ギターを持っていた中年の男性に尋ねてみると、あと30分ほどでプントが始まるとのこと。8人編成のソンの楽団も演奏するらしい。舞台前に、年配の人たちが徐々に集まってきた。写真をしっかり撮影したかった筆者は、最前列に立って始まるのを待った。奏者が舞台上がって音響設備を確認した後、いよいよ本番の演奏が始まった（次頁写真6・7）。

楽団による伴奏のみの歌を含まない部分と、演奏が外れて歌手がデシマを詠み歌う部分に分かれる、典型的なプント・リブレだ。2人の歌手が掛け合いになる、コントロベルシアとなった。日常の出来事を風刺する歌が聴衆を笑わせ、会場が盛り上がってきた。筆者はずっと最前列にいたが、後ろを振り返ると50人ほどの聴衆が集まっている。そのほとんどは年配の人たちだ。

一般的にキューバの楽団は、いかに聴衆を踊らせ楽しませるかで、人気度がわかる。しかしプ



写真6 シエンフェゴスでは日曜の午前中に公園で
プントが演奏される



写真7 聴衆は年配の男性ばかり

ント・リブレはダンス音楽ではない。年齢的に激しく踊るのが厳しい年配の人たちが、このような音楽に親しんでいるのであろう。プントはこうして年配の人たちの娯楽となっているようだ。以上が、筆者が見たシエンフェゴスでのプント演奏の場面である。

4. 子供たちに受け継がれるプント

シエンフェゴスで見たプントは、聴衆が年配の人たちばかりだった。しかし、プントは子供たちに受け継がれていることを、筆者は自分の目で確かめることができた。

2016年4月、中堅都市サンクティ・スピリトゥス市の街なかを散策していたところ、自然史博物館脇を通りがかった時に音楽が聴こえてきた。館員に尋ねると、正面とは別の入口から中庭へ案内された。すると子供たちが、プント・リブレの練習をしていたのである。

ラウー奏者が伴奏し、子供たちがプントを歌っている。その場に譜面や歌詞カードはなく、この子たちはデシマを暗唱している。見たところ、5歳くらいから10歳ほどの子供5人ほどが歌い、その友達や保護者と思われる大人たちも含めて20人くらいが輪になって見守っていた。

集まっている親子たちは白人ばかり。シエンフェゴスで目撃した例もあり、プントは年配の人が親しむ音楽だと思っていた。しかし、こうして小さい頃から触れる機会があって継承されているのを、筆者は知ることができた。



写真8 ラウー奏者の伴奏に合わせてプントを詠み
歌う子供

人口約31万人を擁する国内第三の都市カマグエイで2016年4月、子供たちがサパテオ Zapateo を踊る機会があった。サパテオはプントの一種である、プント・フィーホ Punto Fijo に合わせて踊るものだ。

これまで述べたように楽団の伴奏部分と演奏が外れて歌手がデシマを詠み歌うプント・リブレがキューバでは主流である。一方で、プント・フィーホという形式も存在する。フィーホは「固定」を意味し、プント・フィーホとは演奏を続



写真9 プント・フィーホの曲に合わせてサパテオが踊られる



写真10 ギターとラウーを演奏しながら子供たちがプントを歌う

けて歌も入る形式を指す。

プント・フィーホに合わせて踊るサパテオは、複数の男女がペアになって隊形を組む。男性が女性に対して求愛の仕草をし、女性はそれを断りつつも最後には求愛を受け入れるといった内容の踊りだ。サパテオという名のごとく、靴で床を踏み鳴らす場面もある。男女とも白い衣装を着て、男性は麦わら帽子をかぶって首回りに赤いバンダナを巻く。

カマグエイ市内の中心街にある文化会館で、学芸会のような催しに遭遇した(写真9)。小学生たちによるダンソンやサルサのショーダンスなど舞踊上演を筆者は見学したのである。演目の中にサパテオの踊りが含まれていて、この上演の時は最前列で見て写真撮影をした。演奏者はおらずプント・フィーホの曲は録音だったが、筆者にはサパテオの舞踊を初めて見た貴重な体験である。

カマグエイではそのほかにも、その数日後、中学生くらいの少年少女による、ライブハウスの前座演奏を聴いた(写真10)。男子生徒のギターと、女子生徒の弦楽器ラウーによるプントの演奏だった。余談ながら、筆者はこれまでキューバで10人くらいのラウー奏者に出会ったが、女性がラウーを弾いているのを見たのは初めてだった。

キューバ中部の内陸都市で、子供たちにもこうしてプントが親しまれ、受け継がれている。

5. プント・エスピトゥアーノを聴く

プントには約5種類の形式が存在する。そのひとつに、サンクティ・スピリトゥス州に伝わるプント・エスピトゥアーノ Punto Espirituanoがある。筆者は現地でこれを聴く機会に恵まれた。

2000年2月に筆者が初めて州都サンクティ・スピリトゥス市を訪れた時、日曜の午前中に複数の楽団によるライブが音楽会館 Casa de la Música であった。コロ・デ・クラベというサンクティ・スピリトゥスの合唱団、7人編成のソンの楽団、そしてプント・エスピトゥアーノを演奏する楽団が登場した。

会場の聴衆のうち外国人は筆者だけと見え、珍しがられたのか周囲の地元客に話しかけられた。ソンの曲では年配の女性が一緒に組んで踊ってくれた。どちらかという聴衆の年齢層は高めだったが、少数ながら若い人たちもいる。娯楽の少ない地方都市ながら、こうして郷土音楽を楽しむ人たちが会場は大いに盛り上がった。何人もの地元客に話しかけられたのは嬉しかった反

面、楽団の演奏を集中して聴けなかったのは残念である。

サンクティ・スピリトゥス市を再訪した2016年5月に、プント・エスピリトゥアーノの実演をじっくり聴くことができた。たまたま路上でラウー奏者と話していた時、プント・エスピリトゥアーノ楽団のバンドマスターが通りがかったのである。演奏を聴きたいと伝えたところ、翌々日の朝10時に音楽会館へどうぞと誘われた。

指定された時間通りに音楽会館へ行ってみると、楽器を持った奏者たちが会館入口に集まっていた。一緒に中へ入ると、従業員らしき人が数名いるだけで、聴衆らしき姿は誰もいない。練習がてらなのか、なんと筆者だけのためにプライベートなライブをやってくれたのだ。

プント・エスピリトゥアーノは、8人編成で演奏される。2人のギターとトレスがメロディーを奏でるが、プント・リブレと違ってラウーは含まれない。打楽器はクラベスとグイロ。特徴的なのはベースの代わりにマリンプラを用い、トライアングルを使うこと、そして奏者全員が歌とコーラスを兼ねることである。

さまざまな角度から写真を多数撮り、コンパクトデジタルカメラで動画も1曲撮影した。計5曲も演奏してくれて、とても満足した気分になった。

奏者の友人の女性歌手が会場にいて、大学でも教えているというその女性が、演奏後に丁寧に解説をしてくれた。パラダ・ティピカ・エスピリトゥアーナと呼ばれるこの楽団は、1922年7月16日に結成されたという記録が残る。これをもってプント・エスピリトゥアーノというジャンルが確立された。サンクティ・スピリトゥス州にのみ、計5つの楽団しか演奏していないらしい。

2000年2月に訪れた時は、毎週日曜の午前中に演奏していた。再訪時のサンクティ・スピリトゥス市では、毎月第三日曜のみ音楽会館で演奏されていて、奏者は他の楽団と掛け持ちをしているようだ。

帰国してから、初回訪問時に数枚のみ撮影した楽団の写真と再訪時の写真とを見比べてみた。すると、同一人物と思われる顔ぶれが揃っている。プント・エスピリトゥアーノという郷土音楽を聴けたのは、とても素晴らしい体験だった。2016年5月に撮影した写真と動画は、筆者にとって大切な資料となっている（写真11・12）。



写真11 プント・エスピリトゥアーノの楽団
(2016年5月撮影)



写真12 プント・エスピリトゥアーノの楽団
(2000年2月撮影)

6. プントを歌う代表的な歌手

プントを聴いてみたいという人のために、キューバで著名な歌手を紹介する。

- セリーナ・ゴンサレス＝サモーラ Celina González Zamora (1929～2015)
革命前から活躍して20世紀に名を馳せた、キューバで最も有名なプントの女性歌手。多くの作品の原盤はレコードだが、復刻版CDが日本でもネット販売を通じて入手できる。
- エル・ヒルゲーロ・デ・シエンフエゴス El Jilguero de Cienfuegos (1930～2012)
本名イノセンテ・イスナガ＝ゴンサレス。シエンフエゴス出身のため、このような芸名が付いた。ほとんどの録音はレコードだが、復刻版CDが日本でも入手できる。
- マリア・ビクトリア・ロドリゲス＝ソーサ María Victoria Rodríguez Sosa (1968年生まれ)
現在活躍するプントの女性歌手で、『パルマス・イ・カーニャス』をはじめとしたテレビ番組の出演や、大規模会場でのライブも多い。2010年代に4枚のCDを出していて入手しやすく、プントの曲が多く収録されている。

*本稿は筆者個人ブログ用に作成した「プント」についての記述を基に改稿・加筆したものである。動画や本稿掲載分以外の写真は下記ブログ内、「キューバ」のカテゴリにて参照可
<http://sakaguchitoru.sblo.jp/>

〈参考文献〉

- 石橋純編、2010、『中南米の音楽——歌・踊り・祝宴を生きる人々』、東京堂出版。
- オルティス、フェルナンド、1979、『アフロ・キューバ音楽に於ける打楽器の起源と発達——太鼓物語』、見砂直照訳、音楽之友社。
- さかぐちとおる、2000、『キューバ音楽紀行』、東京書籍。
- 、2016、『キューバ音楽を歩く旅』、彩流社。
- 中村とうよう、1992、『なんだかんだでルンバにマンボ——中村とうようのラテン音楽案内』
ミュージック・マガジン増刊、ミュージック・マガジン。
- Orovio, Helio. 1993. *Diccionario de la música cubana: biográfico y técnico*, La Habana: Letras Cubanas.
- Stanley, David. 1997. *Cuba: A Lonely Planet Travel Survival Kit*, Hawthorn, VIC.: Lonely Planet.

(さかぐち とおる 本講座元受講生、著述家・編集者)